

第22回日本動物児童文学賞の受賞者及び入賞作品

第22回日本動物児童文学賞には、99作品の応募があり、児童文学関係学識経験者（池川禎昭（現代日本少年文学の会主宰））による第1次審査を経て、動物福祉・愛護関係学識経験者（近藤信雄（日本獣医師会理事（動物福祉・愛護部会長））、会田保彦（日本動物愛護協会理事）、齋藤 勝（日本動物福祉協会副理事長）、椎野雅博（日本愛玩動物協会副会長）、須田沖夫（東京都家庭動物愛護協会会長））や関係省庁関係者（西山理行（環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長）、田中孝一（文部科学省初等中等教育局主任視学官））等からなる第2次審査委員会を8月2日開催し、下記のとおり入賞作品として、大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された。

入 賞 作 品

【日本動物児童文学大賞】

「タヌキの来る家」 中島 晶子（鹿児島県）

〈受賞理由〉杏の実を求めてやってくるタヌキとそれを見守る家族三世を描き、祖父の思いが孫に伝わっているのがよくわかる。野生動物の餌づけ、自然環境破壊などの現実の社会問題についても触れられ、人と動物との共存について考えさせられる。人と動物のふれあい、人と動物との共生、動物の福祉・愛護等の観点から最も優れた作品であると認められた。

【日本動物児童文学優秀賞】

「じっとみつめるんだ、太平！」

春野洋治郎（鹿児島県）

〈受賞理由〉割蹄師の父親の技を見つめる太平の視線が見事に描かれている。昔の日本の家族制度がしのばれ、牛や猫を通じた動物とのかかわり、仲のよい兄弟の交流もあり、太平が成長していく前向きな作品であり、優秀賞に値する。

「犬と歩く。」 村上 義人（北海道）

〈受賞理由〉肥満体の少年のケイ君を中心に、犬を介して人間関係ができあがっていき、取り巻く人間関係がとてもほのぼのとしていて良い。随所にユーモアを感じる表現や会話があり楽しめる内容であり、優秀賞に値する。

【日本動物児童文学奨励賞】

「愛ちゃんの遺言」 岩川 和子（青森県）

〈受賞理由〉津軽地方のリンゴ農家で昔から繰り返されてきたふくろう（モホ）との支えあう交流振り、珍しいフクロウの生態を通して、自然との関わりと命の支えあいが良く描かれ、作品全体を通して愛情が感じられる。文章も季節感に溢れまとまりがある作品であり、奨励賞に値する。

「タケシと篤志」～友情に仕切り目なんかないんだ！～

八田 千代（京都府）

〈受賞理由〉ゴリラのタケシと交流の日々をとおして成長する篤志がよく描けており、奨励賞に値する。

「都会のケリ」 田中 清志（大阪府）

〈受賞理由〉都会の高層住宅に住む達也の視点から、都会の片隅で遅く生きる鳥（ケリ）の生態を鋭い観察のもと、まるで図鑑を見ているかのような生き生きとした文章で表現。急激な都市開発の中で自然環境についても考えさせられ、奨励賞に値する。

「おいでハピネス」 倉本 采（東京都）

〈受賞理由〉犬という身近な動物をテーマに、動物を飼うのは責任を伴うことが改めて取り上げられ、家族の一丸となった理解振りは心温まるものを感じる。まさにハピネスストーリーで読後感は爽快であり、奨励賞に値する。

「走れ、ぼくのデン」 小玉 美一（北海道）

〈受賞理由〉少年が捨て犬と出会い、近隣の配慮で一生懸命に飼育する。家族の理解も心地よく、登場人物が皆善人。ハッピーエンドで後味の良い作品である。動物愛護の啓発には良く、奨励賞に値する。

表彰は、平成22年9月12日（日）、東京国立博物館平成館講堂にて、平成22年度動物愛護週間中央行事（屋内行事）が開催され、その中で他団体とともに、表彰式を実施した。



日本獣医師会の藏内勇夫副会長から、大賞受賞者の中島晶子さんに賞状が渡される。

本年度の大賞受賞者である中島晶子さんには、環境省渡邊綱男大臣官房審議官から環境大臣賞が、藏内勇夫本会副会長から日本動物児童文学大賞、株式会社 損害保険ジャパン営業開発第二部 松原正明担当部長から副賞が授与された。

また、優秀賞受賞者である春野洋治郎さんには、藏内副会長から日本動物児童文学優秀賞、アニコム損害保険株式会社企画部 島村麻子獣医師から副賞が授与された(村上義人さんは欠席)。